

活動先団体の地域サロンにて、地域の方とお味噌汁を作っている様子。中には元路上生活者の方もおられた。



外国につながるのある小学生の学習支援を行っている様子。

ボランティアへのはじめの一歩

1 day ボランティア

2016/11/13~12/11

1 day ボランティア

11月13日から12月11日にかけて、「1 day ボランティア」という企画を実施しました。この企画は、「ボランティアに関心はあるけど、一人で始めるのは不安…」 「継続できるか心配」といった人に対して、“1日”お試し体験を通して、ボランティアへのはじめの一歩を踏み出してもらうことを目的としています。参加者が自分の関心に沿った活動先を5つの分野の中から選び、1日体験のボランティア活動を行いました。体験に加えて、事前・事後学習もセットで行い、ボランティア活動について学んだり、体験したことを振り返ったりする機会も設けました。期間中合計18人の学生が参加しました。また、本学の学生コーディネーターが主体的に企画・運営に関わり、活動先との調整や、活動に同行し、サポートを行いました。

加えて、この企画は、東京都教育庁とも連携し、本学の学生のみならず、都内の都立高校・中学校の生徒も13人参加してくれました。

活動の前に、事前学習

ボランティアとして活動先に向かう前に、事前学習として、本学の社会福祉分野の室田先生より、「ボランティアを始めようと思った動機」・「今回のプログラムの社会性」などを考える講座を開講していただきました。およそ3時間半にわたる講義となり、中高生は苦労するかわかりましたが、皆、自分の動機の掘り下げや、自分と社会の接点について考え、非常に熱く語ってくれました。最後は、「首都東京をどのような街にしたいか」「その中に自分を

どのように位置づけたいか」について述べた「ボランティア宣言」を作成し、それぞれ発表しました。



他のグループの発表を聞き、感想や意見を書き込んでいる様子

ボランティア活動と感想

事前学習の後は、各自、活動先での1日ボランティア活動です。子ども・国際交流・環境・スポーツ・路上生活者支援の5分野があり、それぞれの活動先で精一杯ボランティア活動に取り組みました。

【子ども】

子ども分野は、南大沢キャンパス近くの「愛宕小学校」が活動先。授業時間における児童のサポートや放課後の校庭での遊びのサポートを行いました。この活動には大学生参加者4人と学生コーディネーター1人が参加しました。参加学生からは「注意力が散漫だったり、他の子とタイミングを合わせて行動するのが苦手な子に対して、集団の中でどう声かけしていくかということには工夫が必要だと感じた」との感想が寄せられ、活動の中でより良いサポートを模索しながら取り組んでいたことが伺えました。

【国際交流】

国際交流分野は、「八王子国際協会」が活動先でした。複数の文化や言語の生活をしている小学生や中学生の教科学習支援と日本語支援をすることで、これらの子どもたちの日本での学生生活を充実させることを目的とした活動です。こちらには大学生5人が参加。参加学生からは、「正直、初めはうまく話せるか不安で仕方なかったが、互いに心が通じ合ったときの瞬間は何にも増して嬉しかった。とても良い経験が出来たと心から言える」といった感想が聞かれました。参加した学生の中には複数回参加した方や、子ども達ととても仲良くなった方もいたようです。また、受入先の方からも「大変助かったし、支援教室が若返った。ぜひまた来てほしい」との声をいただきました。

【環境】

環境分野は、「JUON NETWORK」が活動先でした。これから森との共存をしていくにはどうすべきか、森林保全とはなにか、を実体験を通じて理解する活動に、大学生参加者3人と学生コーディネーター1人が取り組みました。参加者の1人は「人の関わった森は人が管理し続けることで美しい理想的な森になる、ということを学べたのが最も印象深かった」と語っており、自身の活動がその地域でどのような形で実るのかを理解したうえで活動に取り組んでいたことが伺えます。

【スポーツ】



声かけや残り周回数のカウントをしている様子

スポーツの分野では、「代々木 fun ラン実行委員会」が活動先でした。この団体は、マラソン大会を盛り上げ、ランナーがマラソンを楽しむことをサポートすることにより、市民レベルでのスポーツ活動の発展を助けることに取り組んでいる団体です。今回は、小松菜マラソン大会・皇居 city マラソン大会の2つのマラソン大会に、合わせて大学生参加者6人と学生コーディネーター1人、高校生4人、中学生が3人参加。

参加者からは「参加賞を渡すときに毎回“ありがとう”と言ってくださって、とても嬉しかった」（高校生）といった感想が寄せられました。ボランティア活動を通じて、大きな満足感が得られたことが伝わります。一方で、「ランナーの方に質問されたとき、すぐ答えられなかったのもっと準備しておくべきだった」（高校生）と反省する声や「活動の中で、自分と違った考えを直接聞くことができ、新しい発見に満ちた、とても有意義な時間であったと思える」といった感想もあげられました。

【路上生活者支援】

路上生活者支援の分野は「スープの会」が活動先でした。この活動では、「路上生活者」「ホームレス」と呼ばれる方々へ、味噌汁や電話相談のチラシを配りながら訪問を行いました。その訪問にて路上生活者の方の等身大の「人としての姿・人としての言葉」を見聞かし、「路上」の先にある「地域生活」の可能性を皆で一緒に考える活動でした。特に、12月3日の活動は、路上生活者に対して立ち退きが要求され、路上生活者の方々が困惑した状況の中で行われました。路上での生活を選ばざるを得ない人々と社会とについて、より実感を持って考えて行動する機会となったようです。

参加者からは「ボランティア活動を通して、自分にはない何かを他の人から教えてもらった感じがたりすることが出来ることに感動した」（高校生）という感想をいただきました。

また、大学生からは、「いろんな話をしようと臨んだものの、やはり現実をみて身構えてしまい、ただ物資を配ることしかできなかった。この

ような現実を知ってしまったことへのショックとやるせなさや隠しきれなかったが、決してマイナスではないと思った」という感想があげられました。



路上生活者の方を訪問している様子

活動を終えての事後学習

全ての活動が終了した後、再び全員で集まって事後学習を行いました。活動の振り返りを軸としたこの事後学習では、「ココロ（キモチ）」の振り返りと「アタマ」の振り返り、そして事前学習で作成した「ボランティア宣言」の振り返りの3つを実施しました。

「ココロ（キモチ）」の振り返りでは、活動先が別々の学生達でグループをつくり、「最も感情が動いた場面」について述べあってもらいました。「アタマ」の振り返りでは、活動先ごとのグループで集まり、活動の効果や意義を多角的に振り返るワークを行いました。提案しあった効果や意義は、模造紙にまとめ、班ごとに全員に向けて発表も行いました。最後の「ボランティア宣言」の振り返りでは、活動を終えてからその考え・思いに変化があったか、これからの自分の決意の発表が行われました。皆さん当初と軸は変わらないものの、より具体的なビジョンを持つようになった様子でした。

参加した学生たちからは、以下のような感想が挙げられました。

- ・ 自分の意見だけでなく、たくさんの人の意見をきくことができて、たくさんのことに気付けたので、受講して良かった
- ・ 人と人とのつながりを感じることができ、そこで達成感ややりがいを感じられた
- ・ 事前学習と事後学習で、様々なイメージが変わった。



活動の効果と意義の振り返りを行っている様子

まとめ

今回の「1 day ボランティア」は、「ボランティアに関心はあるけど、一人で始めるのは不安だ」「継続した活動が私にできるだろうか」といった不安をもつ学生のために企画されたものです。実際、参加した大学生の約6割の方は、自主的なボランティア活動を行なった経験が無い方々でした。

そして、活動後のアンケートにて「活動に参加して、ボランティアに対するイメージは変わったか」と尋ねたところ、多くの方が「思っていたよりも気軽に活動できた」と記入していました。初めてのボランティア活動ということで、ボランティアに対する過度な緊張が、初めての参加者には多くあったと思われます。同時に「楽しかった」や「やりがいがあった」、「他の活動もやってみよう」といった意見も多くありました。今回のような1回りのボランティア活動においても、参加した学生たちはその楽しさややりがいを感じ、そこから新しい関心を持ちはじめたことは、彼らのボランティアに関する考えが非常に肯定的なものになった証拠であると思います。

加えて、「またボランティア活動に参加したいと思うか?」と尋ねたところ、ほぼ全員が「また参加したい」と回答してくれました。理由は「机上では学べないことが多く学べたから」「楽しかったから」「恐怖心がなくなったから」「考えを深められるから」「ありがとうと言われたり笑顔になれたのが嬉しかったから」など様々でした。

最後に、今回の取組では、中高生と大学生が一緒に学び、活動しましたが、このことは非常にプラスの学びの効果があつたように思います。中高生は、とても自然で新鮮な意見や感想を話してくれて、そこから気づくことも多く、それを受け止めた大学生も自身の経験をもとに、また自分らしい言葉を重ねて自然にサポートしている場面が多く見られました。年齢の近いもの同士が空間を共にし、上の立場や与えられた役割というわけではなく、同じボランティア活動をする同志として対等に自然な形でそれぞれの役割を發揮することで、よりいっそう双方の学びと成長につながったようです。



事後学習にて、全員で撮った集合写真